

特集No.4

「旧街道を歩く」 歩きながら考えたこと

石田 富男



旧街道を歩いている。

旧東海道は日帰り十九回と一泊一回の二十一日間をかけて東京日本橋と京都三条大橋間を歩いた。といっても日本橋からではなく、面白そうだと思ったところから江戸方面、京都方面にこだわらずバラバラに歩き始めた。名古屋という立地はそんな歩き方に都合がよい。

今は中山道を草津から順に歩いている途中で、先日軽井沢で一泊してようやく松井田まで来た。これも最初は日帰りで歩けたが、このあたりまで来るとは結構時間がかかる。下諏訪以降は宿泊することにした。

黙々と歩いていると色々なことを考える。考える時間がある。

まちの変化である。旧東海道の東京近辺は広く拡幅され、旧街道の面影を全く留めていないところが多く、あまり面白くない。日本橋から歩き始めていたら続かなかったかもしれない。一方、木曾路では鉄道で街道が分断されてしまったり、国道の下をトンネルでくぐったり、廃道になったところもある。個人住宅の庭先を通るなど、なぜこんなところをと思うところもあって面白い。道路が拡幅されたのちにバイパスが整備されたせいか、広い道路

であるにもかかわらず、あまり車が通らない道もある。この空間をうまく使えると魅力的なまちに蘇ることができるかもしれない。

市町村の取り組みや市町村界といったものにも考えさせられる。街道としては繋がっているのに、わかりやすかった案内表示がなくなってしまう。旧街道を活用したまちづくりへの取り組みの違いが歴然とあらわれたりする。住んでいる人は普段歩いている道が歴史的な街道であることを知らないのではとも思ってしまう。

昔ながらの街道の面影が残されているところでは、景観整備や空き家活用が進んでいるところがある。学生や若い人達が活用に取り組んでいる。古民家カフェとして人気を集めているところもある。地域の人々が愛着を持って取り組んでいるところには好感が持てる。



中山道本山宿
広すぎて寂しさを感じてしまう。道路を狭くするなど、大胆に作り変えてしまった方がよいのでは。



馬籠と妻籠の間にある休憩所
私とボランティア以外は全員欧米系の外国人。ボランティアのおもてなしも手慣れたものだ。

一方で増え続ける空き家に手をこまねいているところも多い。ある宿場では高齢単身の住まいも多く、あと十年経ったら空き家だらけになってしまう。まいかねないという。

馬籠から妻籠にかけて旧街道を歩く多くの外国人がいた。日本らしさを求め、旅する外国人が増えている。情報社会に続くソサエティ5.0(超スマート社会)では観光産業が大きく伸びると想定されている。現状では外国人旅行者の歩く区間は限定されているが、旧街道沿いに残る歴史的な建物やそこで営まれる人々の暮らしを体感することができる、そんな点での空き家活用の取り組みを繋げていくことができれば、歩く人も増え、まちが活性化するのではないだろうか。
何よりも行政域に捉われない歩く人の視点に立った取り組みが必要だと思ふ。歩く者にとって市町村界は関係ないのだから。